

鐘巻

清次は、真砂の者達を引き連れて・・・約束の刻限に、道成寺へと向かった。道成寺は小高い山の上にあり、門前町から六二段の石段を上がる。

大きな正門が石段の上にそびえ立つ。その門の中には、増長天と広目天の二神が納められ、くぐる清次達を見張っている。門を抜けると・・・広い中庭がある。

正面には講堂、左側には宿坊、右側には、三重の塔がある。三重の塔の前には、ネズの樹が生えていて・・・さらに、その右側に、改修中の鐘楼があった。

講堂の前で待っているはずの・・・安珍の姿は見えない。

昨日・・・もう一度、道成寺へ来て欲しいと言ったのは、安珍だったのだが・・・。

読経の声が聞こえる・・・清次は気がついた。

あれは、安珍の声だ・・・。

どうやら、鐘楼の前の地べたに降ろしてある鐘の中から・・・聞こえて来るらしい・・・。

「安珍・・・何のつもりだ？」

「清次か・・・？」

読経が止み・・・鐘の中から声が響いた。

「・・・きさま、それで我々から危害を追わされぬよう・・・逃げたつもりか？」

「いや・・・その逆だ・・・逃げられぬように、閉じ込めたのだ・・・。」

地べたにおかれた鐘の中から、ただ、声だけが響いてくる。

それは、滑稽な風景だった・・・。だが、その口調が・・・真剣味を帯びている。

「閉じ込めるっ！」

「そうだ・・・俺は、この安珍という臆病者を逃がさぬように、この一人では動かせない重い釣鐘の中に閉じ込めた・・・。

清次・・・どうか、この俺を、このまま焼き殺してはくれまいか・・・？」

「なんだと？・・・安珍！お前は何を言っているのだ？」

「お願いだ。頼むからきいてくれ・・・幸い・・・鐘楼は、改装作業中だ・・・。あの木材が、火種になるだろう・・・。」

「しかし・・・いくら、なんでも、俺たちは、そんな事を望んでいるわけではないぞ・・・。」

「清次・・・お前は、昨日、おれが憎いと言っていたな・・・。それは、俺も同じなのだ・・・。俺は、この安珍が憎い・・・だから、罰を与えたいのだ・・・。」

最愛の妹を殺された・・・お前になら、わかるだろう？

俺は、この安珍が許せない・・・どんな罰を加えても・・・許せない。せめて、こいつを焼き殺してやる・・・。俺は、愛する者を殺してしまった・・・この世で、一番、大切な人を、この手で殺してしまったんだ！」

「お願いだ！清次！・・・どうか、この俺を焼き殺してくれ！」